

JICA関西訪問



JICA関西を訪問。世界の子どもたちや課題についていろいろな人の話を聞いた。

難民についての授業



上：難民について自分たちができるることを考え、黒板に貼っていった。左：難民について学び、考えたことを壁新聞にまとめる。

JICAの研修や授業実践で得られた学びは、岡山県下の学校や先生方にも積極的に伝えています



大森洋介（おおもり・ようすけ）さん
岡山県備前市立片上小学校教諭
岡山県小学校教育研究会総合学習部会副部長

開発教育指導者研修 参加者募集中！

JICA地球ひろば（東京）では毎年、全国の教員に向けた開発教育指導者研修を行っています。現在、参加者を募集中！また、全国15のJICA国内拠点でも、教員研修や見学受け入れを実施しています。詳しくはこちらへ。



工夫して子ども服を回収



低学年に向けて、紙芝居を使い子ども服を回収する意義を伝えた。



子ども服を回収する理由をまとめたチラシを作成して配布したことが、多くの人の共感を呼んだ。

なかに「プロジェクトに参加して、難民に服を届けたい」という思いが自然に生まれてきた。

2学期は、全クラスに服の回収箱を置いたが、当初はほとんど服が集まらなかった。「子どもたちはすぐに集まるだらうと考えていたので、少しショックだったようです。しかし、なぜ集まらないのかをみんなで真剣に話し合って、ほかの学年の児童に服を集めていた理由を伝えました。そこで、低学年には紙芝居で説明し、他学年と一緒に気づきました。こうした活動が授業参観に来た保護者には、わりやすいチラシを配りました。近隣の中学校や認定こども園にも声をかけ、自治会には回覧板を回してもらいました。こうした活動が実を結び、段ボール48箱分の子ども服が集まりました」。

さらに難民や世界の課題を学ぶため、社会科見学では神戸市のJICA関西を訪ね、国際協力について、困っている人を助けたいといふ気持ちが高まり、地域やクラスの中で困っている人を見つけると、自然に声かけや手助けできる児童が増えました」と、大森さんは言つた。

「難民」は子どもたちにとって身近な話ではありません。子どもたちの主体性や対話を大切にした授業を実践し、世界の現実や課題を前に、なにかしたいという気持ちが高まってきたタイミングでプロジェクトを紹介しました。その結果、子どもたちが「ぜひやりたい」と言い、この取り組みが始まりました。「他人事」だった問題を「自分事」として受け止め、社会と関わる大きさを感じ、自分のこれから生き方や生活のあり方を見直すことができたと思います」と話す教諭の大森洋介さん。

1学期は、写真やニュース、映像資料から世界の子どもたちにまつわる課題について調べ、整理し、壁新聞にまとめて中間発表を行った。また、ユニクロの店長による出張授業を受け、遠い存在だった難民のために自分たちができることがあると知り、子どもたちの

授業には心に響く体験を取り入れる

大森さんはJICAが主催する教師海外研修への参加をきっかけにJICAとつながり、今回の授業実践では、「開発教育指導者研修」が役に立ったという。「難民をテーマにした18年度の研修では、全国の先生方と学習指導案を議論し、アドバイザーの指導のもと授業計画から実践、報告までが実践的で大きな学びとなりました」。総合的な学習に長年取り組み、教師としての経験を積み重ねてきた大森さん。子どもたちの学びを確かなものにするためには、「探究的な学習のサイクルをくり返すこと」と「心に響く体験活動を取り入れ、協同的な学びを行うこと」が大切だと言う。1年かけ、世界の課題や難民についてさまざま視点から学び、子どもたちが自発的に参加を決めたプロジェクトを通じた学びは、心に響く体験になつたちがいない。

この取り組みは、「届けよう、服のチカラ」プロジェクトで高く評価され、優れた取り組みを行った学校を表彰する「届けよう、服のチカラ」アワードで優秀賞に輝いた。6年生が最後の1年間に学んだことはとても大きかった。

世界につながる教室④

心に響く体験活動で学びを深める 難民×子ども服

岡山県備前市立片上小学校教諭の大森洋介さんは、1年間かけて6年生の総合的な学習の時間で難民についての授業を行った。小学生が身近な問題としてとらえにくいこのテーマに、どう取り組んだのだろうか。

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトに参加



集めた子ども服を体育館に並べて記念撮影。



段ボール箱に詰めた子ども服を運ぶ子どもたち。

体育館にすらりと並べられた子ども服、その数473枚。すべて片上小学校の6年生26人が集めたものだ。

総合的な学習の時間で世界の子どもたちが抱えている現状を知り、ユニクロやジーユーを展開する「届けよう、服のチカラ」

難民のためにできることがある

「難民」は子どもたちにとって身近な話ではありません。子どもたちの主体性や対話を大切にした授業を実践し、世界の現実や課題を前に、なにかしたいという気持ちが高まってきたタイミングでプロジェクトを紹介しました。「他人事」だった問題を「自分事」として受け止め、社会と関わる大きさを感じ、自分のこれから生き方や生活のあり方を見直すことができたと思います」と話す教諭の大森洋介さん。

1学期は、写真やニュース、映像資料から世界の子どもたちにまつわる課題について調べ、整理し、壁新聞にまとめて中間発表を行った。また、ユニクロの店長による出張授業を受け、遠い存在だった難民のために自分たちができることがあると知り、子どもたちの

「プロジェクト」に参加し、多数の子ども服を集めた。これらは、プロジェクトの一環として国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を通して世界各国の難民の子どもたちに届けられる。

「プロジェクト」に参加し、多数の子ども服を集めた。これらは、プロジェクトの一環として国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を通して世界各国の難民の子どもたちに届けられる。